

観光資源、観光地の 魅力評価の系譜

——誰が評価してきたのか

帝京大学経済学部教授

溝尾 良隆

1

風景は人間がつくる

自然は何も言わない。人が自然に接し感動して、素晴らしい風景だという。その風景に多くの人が共感すると、自然の一部が観光対象資源になり、その風景を見るために、人はわざわざ出かけていくのである。

当初、自然は何に利用されるかわからない資源であって、湖であれば私なら全て観光資源と考えるが、他の人には湖は飲料水としての上水資源、あるいは人によっては魚介類を取る漁業資源になったりする。日本でコメの増産が必要だった時代、日本第二位の大きさの湖だった秋田県

八郎潟が干拓されて農地に変貌へんぼうしてしまった。当時、八郎潟は、農業資源が観光資源よりも価値があったからである。

東京電力にとって尾瀬ヶ原は水力発電に絶好の地で、ここにダムをつくる計画が戦前から存在していた。しかし、地元の人々や植物学者などこの風景を貴重とする多くの人たちの反対で、計画は実現されず、近年ようやく、その計画は破棄されたのである。

風景の見方

自然の一部が人間によって切り取られ、それが素晴らしい風景と言われるには、湖とか山のように、資源の範囲が明確なものは、その対象への感動の度合いを評価しやすいが、農村風景とか河川のように広範囲のものは、普通の人にはどこが優れているか捉えにくい。北海道美瑛びえい町の農村・農業景観(写真1)に今では多くの人々が魅入っているが、それは写真家前田真三の眼で美瑛の風景を切り取って、風景写真として世に紹介してから注目を浴び、彼の価値



写真1 美しいと捉える価値観から切り取られた美瑛町の農業景観(筆者撮影)

観に人々が共感したからである。それまで観光客がほとんどいなかった美瑛は、今ではペンションや民宿が約四十五軒も集まる観光地となった(筆者は一九六九年七月、バスでここを通過するとき「ジャガイモ畑、麦畑が丘の斜面にみごとなスロープを描く」と記録している)。

同じく高知県四万十川は昔から存在したにもかかわらず、カヌーイストの野田知佑が「日本一の清流の川」というレッテルを貼り、一九八三年にNHKが四万十川を取り上げ、「日本最後の清流」と放送してから、観光対象となっていた。日本交通公社の『交通公社の新しい日本ガイド』を見ると、初版の一九七四年には、四万十川の文字はどこにも見当たらないが、一九九〇年になると、横書きのガイドブックに特別に別枠の縦書きにし、十二字×二十七行で紹介している(筆者は単なる川好きで、一九六二年に土佐中村から江川崎までバスで四万十川をさかのぼっていった)。専門的な立場から、前田・野田の両者が、風景の見方を一般人に教えたのである。

国木田独歩や徳富蘆花は武蔵野に住み、武蔵野の自然の時間的季節的変化を観察した著書が評価されたが、彼らとて、ロシア文学からの影響を受け、何の変哲もないような自然に對し、その見方を学んだのである。

普遍的な評価の難しさ

自然資源、人文資源を問わず、全てが観光対象となるが、そこにはそれぞれに優劣の度合いがある。観光対象資源の嗜好には個人差があり、特に人文資源にその差は大きくなる。

建造物、庭園などの人文資源は、人間が精魂を込めて芸術作品に仕上げたものであるから、人の心を打つようにできている。しかし、優れているとレッテルを貼られても、芸術家の作品を一般の人が理解するには時間がかかる。当然、作品には巧拙があるため、人に与える感動の度合いに強弱が生じる。

しかも、庭園に見るように、フランス、中国、日本と国によってその作り方が違うし、その国の人々の嗜好が異なる。山岳に対しても、ヨ

ロッパでも、日本でも、中国でも、見方が異なっていたし、それが時代により変化してきている。

雪のように、積雪地域では身近な雪が場合によっては害と見るのに對し、普段雪に接する機会がない九州や沖縄の人々、あるいは東南アジアの人たちにとっては、雪を見るのが憧れの観光資源である、といったように、同じ雪を見ても両者の見方は異なる。

事ほどさように、観光資源を評価し、その評価を万人が納得するのは難しい。

観光対象資源の評価の系譜

それでは、日本を中心に奈良時代から現代まで、誰が何を評価して、それを人々がどのように受け入れていったのかを概観する。

奈良時代～室町時代

奈良時代から室町時代までは残された文字を読むということから、上流階級の人々の間で憧れの地が知

れわたるわけで、国家的事業であった古事記と日本書紀に登場する場所、古今集・新古今集に代表される「歌枕」の地、小説では源氏物語による明石・須磨・宇治などが思い浮かぶ、人気の地であった。

万葉集は古今集よりも早く編まれ、古今集の歌人たちには影響を与えたが、古今集・新古今集の陰に隠れ、その存在が再評価されたのは江戸時代中期で、国民に広く知られたようになったのは、明治時代に正岡子規が世にその素晴らしさを伝えてからである。

「歌枕」とは、多くの歌人たちによって和歌に詠まれてきた名所で、『能因歌枕』によれば、国別の歌枕の場所数は、山城に八十六、大和に四十三、それに続いて陸奥(みちのく)にも四十二とほぼ大和と同じ数になっている。

陸奥は京の貴人たちは、実際には行くことは少なかったが、塩釜・松島などに憧れを抱いて、歌に採り入られていたのである。歌枕ではサクラは吉野、モミジは龍田という場所の決めつけがされていたのである。

旅人は寺社への参詣が旅の主目的であった。熊野詣では平安時代前期の九〇七年に宇多上皇に始まるとされるが、本格化されるのは平安時代後期、一〇九〇年から十二回の熊野行幸を行った白河上皇からである。その後、鎌倉時代にかけて、鳥羽上皇が二十一回、後白河上皇が三十三回、後鳥羽上皇が二十八回も熊野詣を行ってゐる。

一二二年承久の乱で、後鳥羽上皇の倒幕が失敗してから熊野は武士の参詣地となり、室町時代には庶民の参詣も盛んになった。伊勢神宮、金刀比羅宮、善光寺への参拝も、鎌倉時代には庶民に浸透していった。

鎌倉に武家政権が確立してから、鎌倉と京を結ぶ東海道の往来が盛んになるにつれ、著された数々の書物の中で、人気の高かった『伊勢物語』を踏襲しつつ、富士山を見た喜びを含めて東海道の名所の地が繰り返して記述された。

江戸時代―旅行の隆盛と観光地選定

五街道（東海道、日光街道、奥

州街道、中山道、甲州街道）が整備され、参勤交代制度が実施されると、日本の主要道路の往来がにぎやかになってきた。

庶民の間でも、湯治や寺社参詣の目的で旅をする。それに合わせて、旅に関する情報も庶民に届くようになった。葛飾北斎の「東海道五十三次」、安藤広重の「名所江戸百景」や「東海道五十三次」が、名所の人気を高めるのに寄与している。今では紀行文の代表である芭蕉の「おくのほそ道」は、当時、紀行文の位置づけが低く、芭蕉も紀行文は趣味の世界で出版する気はなかったほどである。俳諧の確立を目指した芭蕉の没後六十年くらい経ってから芭蕉の一連の紀行文も読まれるようになり、以降、俳句の道を志す人たちは、「おくのほそ道」を読み、芭蕉の跡をたどるようになったのである。

一五〇〇年、室町時代に選定された近江八景が江戸時代に定着し、それに合わせて全国各地に八景が誕生することになった。今日までよく知られている「日本三景」は、儒学者・林羅山の息子、林春斎が一六四三年

に発表したときは「三処の奇観」といった。後、海内三景、三勝景と言われたりしながら、五十年後に「日本三景」に定着した。三景は、島または半島の水景を主とし、寺社を配した風景になっている。

現在あまり知られていないが、一六九〇年に俳人大淀三千風が「本朝十二景」を選んでゐる。江戸時代後半となると、これまでの「歌枕」のように想像上の地域でなくて、実際にその地を訪れて、旅（旅行）の対象地を評価するようになってきた。

それが、地理学者・古川古松軒の『西遊雑記』『東遊雑記』であり、医師・橋南谿の『東西遊記』、画家・谷文晁の『日本名山図会』である。古川は、日本の観光資源・観光地を五段階に分けて評価し（表1）、橋も名山を五段階に分けている（表2）。谷は、日本の名山九十座を選んでゐる。

明治時代～現代

明治時代になると、日本国内を自由に往来できるようになり、出版物や新聞、ラジオ、戦後にはテレビと、情報手段が発達すると、観光資

表2 橋南谿が選ぶ日本の名山 (1795年)

1	富士山		
2	白山		
3	立山		
4	霧島山 月山	雲仙岳 岩城山	駒ヶ岳* 岩鷲山
5	彦山 海門岳 伊吹山 筑波山	阿蘇山 高峯** 妙高山 幸田山	姥ヶ岳 御嶽 地藏岳 御駒ヶ岳

大山、妙義山は未だ見ず 桜島山は景色無双なる
*信濃 **石鎚山

注：橋南谿『東西遊記1』平凡社197pより著者作成

表1 古川古松軒の評価 (1788年)

1	日本第一	富士山・田子浦及び清見ガ関・三保ガ崎
2	4、5目下	松島
3	松島の8、9目下	坊の津の海辺 天の橋立
4	先ばかり劣らんか	箱崎の海面・海の中道 須磨浦・明石より淡路島眺望
5	人びと好む所 勝劣を論ずべからず	和歌浦、巖島、象潟、住吉浦、桜島、佐賀の関、肥後玉島川、虹ヶ浜の風景、門司ガ関、柳ガ関、赤間関、鳥海山、月山、岩城山の雪景、雲州三保ガ関、弓の浜の海上、二見浦、鞆の津より伊予路の詠め、琵琶湖の浦うら、淀、浜川の浦、八幡、山崎、伏見の詠めより、長柄・難波津の景色

注1：彼は、「山で富士に越ゆるものなく、景においては松島にまさるものなし」という
注2：古川古松軒『東遊雑記』東洋文庫27（平凡社）245pより著者作成。
すべてに国名がついているが、わかりにくい地名のみに付記する

源の評価は、特定個人、全国民による投票、専門機関あるいは専門家を集めた委員会で行われた。さらには評価が世界的な規模でなされ、日本の観光資源の評価に影響するようになってきた。

明治時代、関所が廃止され、大井川など河川に橋が架けられ、人の往来が自由になった。一八七二年(明治五年)に、わが国に初めて鉄道が登場してから、国鉄、民鉄が急ピッチで鉄道を建設し、一九二二年(大正十一年)に鉄道の全国網はほぼ完成する。そのお陰で、これまで歌枕の地であった東北地方や、未知の北海道が、大町桂月ら作家たちによる紀行文で紹介され、層雲峡や奥入瀬溪流が世に知られたるのであった。

この時期、イギリス人宣教師のウエストンやイギリス人技師のガウランド(ゴーランド)らの外国人による山岳記録から影響を受けた地理学者・志賀重昂が、一八九四年(明治二十七年)に著した『日本風景論』の与えた衝撃は大きかった。この書ではこれまで人気の高かった、温和な優しい日本三景的な景観を否定し、

信仰対象から登山対象に山岳を切り替えて、山岳のような規模の大きい観光資源こそ、日本が誇るものだと力説した。

林春斎、志賀重昂のような特定個人の評価が、国民に影響を及ぼすのは難しくなっていくが、戦後、一九六四年に作家で登山家の深田久弥が選んだ「日本百名山」は今日でも、多くの人の登山選定のバイブルになっている。

国民の投票による選出で最も大規模だったのは、一九二七年の「日本八景」選出である。はがきによる投票枚数は九千七百万枚を超えるという過熱ぶりであった。しかしこのとき、わざわざ「日本三景は除け」という条件を出し、「富士山は別格で選定の対象にしない」「昭和の新时代にふさわしく、これまでの個人の一部の趣味に片寄せた鑑賞で定められている日本人の風景観を改める」という名目であった。日本三景は、新しい昭和の時代にはふさわしくないというのである。

こうした国民投票は、戦後もたびたび行われたが、影響があったのは

一九五〇年の「新日本観光地百選」が最後である。このときに全国一位になった蔵王山が脚光を浴び、観光地の仲間入りをしていくのである。

一九三四年からの国立公園の選定に見るように、専門家を集めて審議して全国の中から、その基準に合

った資源を選出するようになる。戦後に、国が文化財保護法(一九五〇年)に基づいて、国宝、重要文化財、天然記念物、名勝、史跡などを選定した。

同種のもものは戦前にもあったが、国宝などの選定基準にあいまいさが

表3 日本の世界遺産

		2014年6月現在	
		登録名称	所在地
自然遺産	1	屋久島	鹿児島県
	2	白神山地	青森県・秋田県
	3	知床	北海道
	4	小笠原諸島	東京都
文化遺産	1	法隆寺地域の仏教建造物	奈良県
	2	姫路城	兵庫県
	3	古都京都の文化財	京都府・滋賀県
	4	白川郷・五箇山の合掌造り集落	岐阜県・富山県
	5	原爆ドーム	広島県
	6	厳島神社	広島県
	7	古都奈良の文化財	奈良県
	8	日光の社寺	栃木県
	9	琉球王国のグスク及び関連遺産群	沖縄県
	10	紀伊山地の霊場と参詣道	三重県・奈良県・和歌山県
	11	石見銀山遺跡とその文化的景観	島根県
	12	平泉-仏国土(浄土)を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群	岩手県
	13	富士山-信仰の対象と芸術の源泉	静岡県・山梨県
	14	富岡製糸場と絹産業遺産群	群馬県

資料：環境省・文化庁ホームページを基に公益財団法人日本交通公社にて作成

あり、戦後に見直しを図ったのである。選定の目的は貴重な資源を保護することであるが、国が選定したことで権威づけとなり、その地を旅行者が訪れることになり、保護資源が観光対象となっていく。町並みなどの伝統的建造物群保存地区（一九七五年制度発足）も同様である。

世界基準による日本の観光資源評価

情報が世界中に伝わるようになると、外国の機関が日本の資源を評価したり、世界規模の評価の中に日本の資源が選定されたりするようになってくる。

ミシユランは、ホテルやレストラン、観光地の選定とランク付けを、自国のフランスから始め、ヨーロッパ各国に広げ、二〇〇五年にニューヨークへ、二〇〇七年に東京を評価対象地域に選んだ。同時に観光地の評価も行われ、高尾山が三ツ星になり、日本人だけでなく外国人が訪れる地にもなっている。

さらに強い権威付けとなったのが、ユネスコが登録する世界遺産である。

一九七二年の世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約（世界遺産条約）採択後、わが国は二十年も経った一九九二年、百二十六番目という遅い批准国であったが、その後は、世界遺産を学ぶ大学の学科が新設されたり、世界遺産検定試験（民間資格、二〇〇六年開始）が実施されたりするなど、国民の関心は高くなっていく。

海外旅行の商品では、世界遺産が何カ所含まれているかが集客に影響するほどである。二〇一四年現在、日本には自然遺産が四カ所、今年六月に「富岡製糸場と絹産業遺産群」が新たに登録されて、文化遺産が十四カ所存在する（表3）。

客観的評価への取り組みと風景の見方・見せ方

評価を客観化する手法を求めて筆者はかつて観光資源評価の客観化に取り組んだ。風景の見方、評価は主観によるものだといつまでも言っていると、なぜ八郎潟は潰して

もよくて、尾瀬ヶ原は駄目だということができるのか。それでは、他の観光資源はどうなるのか。優れた観光対象となる資源を保護するためにも、あるいは旅行者の誘致力を測定するために、観光資源の客観的評価の確立が望まれていた。

筆者はどのようにして観光資源を客観的に評価する手法を考察したか。

誤解を招くかもしれないが、単純化すると、次のような式を想定する。

$$y = b + a_1x_1 + \dots + a_nx_n$$

yは、専門家が評価した外的基準である。
x_nはyを評価するいくつかの要因で、a_nは各要因の重みである。bは定数項である。

専門家が評価したように、いくつかの要因から観光資源が評価できないかというのが、筆者の研究であっ

た。yにあたる外的基準については、筆者が専門家と言われる人十五名にインタビューして作成し、xの要因を考え、各要因の重みaとで計算していく。重みが分かり、要因が分かれば、yが求められるというものである。

湖の評価には、周囲の景観、透明度、接近性の三要因で評価できるところを結論付けた。

観光対象資源をよりよく見せる

観光対象となる資源をよりよく見せるのが大切であるのに、来訪者により近くでよく見せようと競い合い、逆に観光関連の宿泊施設や飲食施設が利益優先のあまりに、観光対象に接近しすぎて本来の評価を低めている例が多い。その施設から風景の対象が美しく見えても、他の施設から見ると、その施設が前景に入ってしまう、せっかくの対象資源の景観を壊してしまっているのである。観光対象周辺に施設が乱立すると、世の人は「あそこは俗化した」とか「観光化しすぎた」といって、本来の価値への評価よりも低くめてしまう。

富士山が自然遺産の登録では無理だったので、文化遺産に切り替えたのもそうした例である。

富士山にしても、蔵王山、十和田湖にしても、自然資源が都道府県の境界になっていするために、県間の競争になって、乱開発が生じている。それらの地域は国立公園、国定公園になっているので、国が一体的、総合的な整備や開発するのが合理的であろう。

さらに、どの地点で観光資源を見せるかという、見せ方の問題も重要である。滝であれば、落差の高さ一五〜二倍の距離を滝からとり、滝の中央よりやや下部に観瀑台があるといったと言われる。滝つぼでは水量のすこさは感じても、滝の全体像が分からない。滝の上流部を見せてしまうと幻滅を感じさせることがある。もともと、ナイアガラの滝やイグアスの滝のように、ものすごい水量で落下するのは、上流から見ても迫力がある。

十和田湖には、発荷峠や御鼻部山など十和田湖を見る眺望地点が数カ所ある。それぞれに特色ある風

景が味わえるが、どこからどのように見せるか、どの眺望地点が優れているかは、地元で旅行者に知らせる以外にない。

同じように、松島を訪れる人のほとんどは、塩釜港から松島海岸まで船の遊覧で松島を觀賞している。船

上の旅行者と、江戸時代からの四大観、現在さらに好展望地として挙げられている三カ所からの松島を俯瞰した旅行者とは、同じ松島の風景を見たといっても評価は異なるだろう。筆者が鳴子峡と奥入瀬溪流を訪れて、渓谷は、下流部から上流部に

向かって歩くのがよいことがわかった。上流部に向かって歩くと、川の流れが目線と同じ高さになり、川を中心とした周辺の渓谷の風景がよく見える。上流部から歩くと、川の流れに押されるようでせわしくなるし、眼前に川はなく、川の方が低くなり、

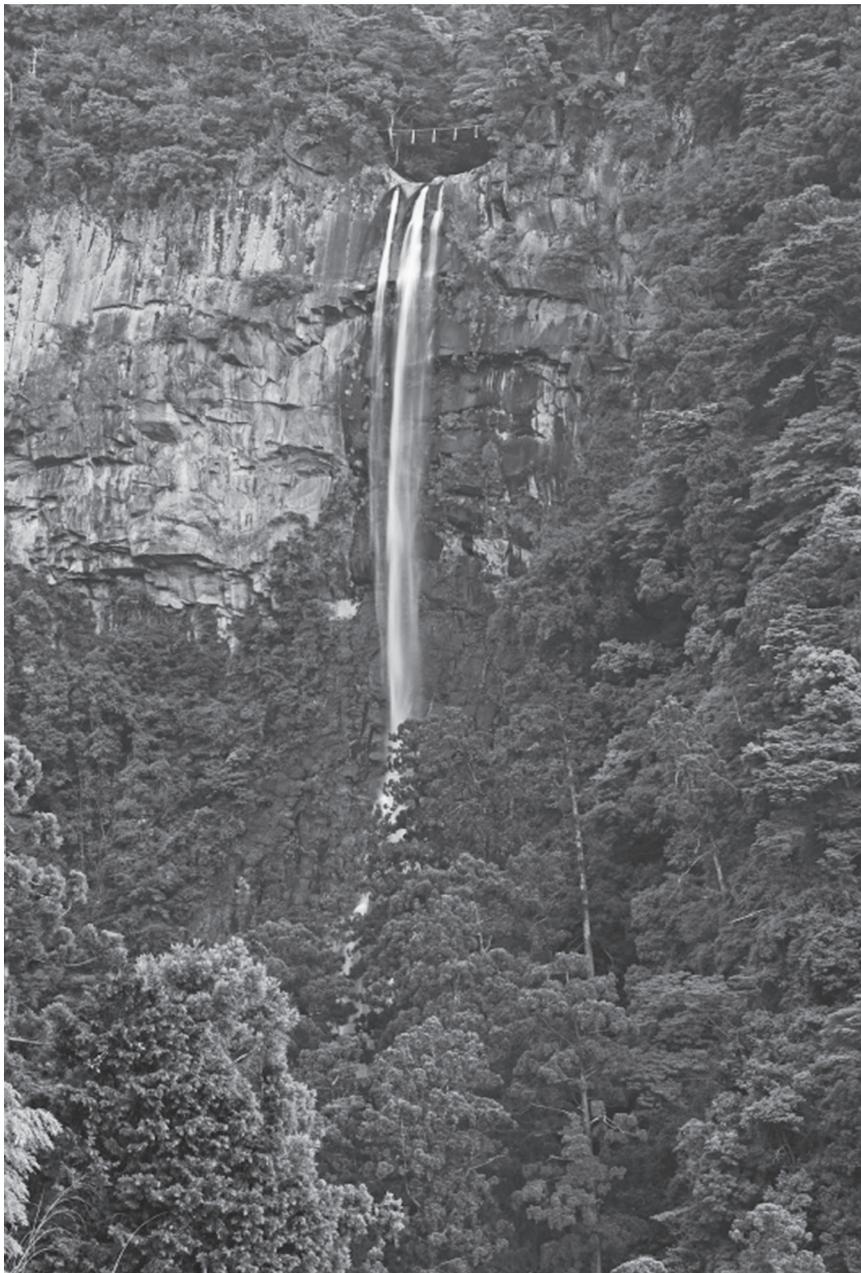


写真2 御神体「那智の滝」と夏・年末の2回張り替えられる注連縄/JTB Photo

見下ろさないと駄目になる。溪谷をこうした見せ方になっているかどうかである。

自然資源と人文資源との関係

最後に観光対象資源の評価の際に留意することを述べたい。山と湖は一体的に評価するとその度合いは高くなる。北海道の駒ヶ岳と大沼は、どちらが欠けても駄目である。富士五湖、それぞれの湖の評価でも、富士山がなかったら、どれだけの評価になるのだろうか。

観光資源の評価は、特集3の表2(22ページ)に見るように、普通は自然資源と人文資源とに分けるが、自然資源に人文資源の要素が入っているし、人文資源に自然資源の要素が入っている点を考慮して評価するのが重要である。

例えば、日本の山岳は、明治期に入るまでは、立山、白山、御嶽山のように信仰の対象の山、つまり人文資源的な評価をされてきたので、自然景観とともに宗教対象の山であることを評価に加える。那智の滝は、自然資源の評価も優れるが、さらに

滝そのものが御神体であると分かれば、那智の滝の奥深さが理解できよう(写真2)。

同じように、巨岩は自然資源であるが、巨岩が神の磐座いわくらになっているところも多く、人文資源の要素を加えなければいけない。これまでは、オーストラリアのエアーズロックと呼ばれるていた巨岩は、アボリジニの聖なる地であることを尊重して元々のウルルに戻された。

それは一般人には、世界で二番目に大きい単一岩が夕陽に照らされた赤い岩として、感動する自然資源であるが、昔からその地に暮らしてきたアボリジニはウルルと呼び、神聖な聖地であり岩に登るなんてとても許されるものではない。もしアボリジニが評価すれば、人文資源的な評価になる。

庭園は人文資源に入っているが、元々は理想的な自然景観を人間の手によって構成されたのが庭園であるから、庭園には自然資源的な評価が必要なのである。庭園の今日的問題は、東京の諸庭園に見るように、周辺が高層ビルに囲まれて、これらの

ビル群に圧迫されて庭園に広がりを感じられなくなっていることである。京都などでも借景式庭園の背後の自然が開発されたり、背後にビルなどの人工物が入りこんだりして、庭園本来の価値が減じてしまっている点である。

日本の素晴らしい観光資源を遺すために

今回、公益財団法人日本交通公社で発行した『美しき日本 旅の風光』は、日本全体の優れている観光資源の大筋を紹介したもので、この資源がなぜ入っているか、なぜあの資源が入っていないかと疑問を持つ方もいらっしやるであろう。理解を深めるために、当財団としては、なぜこれらの風景が素晴らしいのかというカルテを作成することが大切である。全都道府県から、今回取り上げた対象と同等のもの、あるいはそれ以上のものがあれば、写真と評価内容をいただいで再検討する。それらを三年くらいかけて、日本の優れた風景を解説した最終評価の書籍を

刊行してほしい。ミシュランの評価は、利用者からの多くの評価が集まり、再審査も考慮に入れているから信頼されているのである。観光資源のミシュラン版を確立してほしい。

これまで、日本の優れた資源を守ってきたのは、環境省と文化庁である。日本政府は、美しい日本、文化力のある日本を創造するためにも、両省庁の位置づけをもっと高くするべきであろう。

(みぞお よしたか)

〔参考文献〕

・溝尾良隆「観光学と景観」(古今書院、二〇二)



溝尾良隆(みぞお よしたか)

帝京大学経済学部地域経済学科教授、学科長。理学博士。公益財団法人日本交通公社理事。群馬県出身、東京教育大学理学部地理学専攻卒業。1964年株式会社日本交通公社外人旅行部に入社、1968年財団法人日本交通公社へ移籍。1989年立教大学社会学部観光学科教授。観光学部教授、観光学部長、日本観光研究学会会長を歴任。